事例3

自由度の高い科目選択や5段階評価を行う探究学習で、自ら学びを深める生徒を育む

大阪府教育センター附属高校

大阪府教育センターの研究・研修機能と一体となって教育活動を展開する大阪府教育センター附属高校は、約60もの選択科目を設定している単位制高校だ。また、教育課程特例校の指定を受けて設定している学校設定教科・科目「探究ナビ」では、生徒に各活動の目標とルーブリックを提示し、生徒との対話を通じた形成的評価を重ねた上で5段階評価を実施している。

教育課程 概要

学年による教育課程の区分：なし（単位制）　**学科：**普通科
卒業までの履修単位数：90単位
各年次の履修単位数：1～3年次各30単位
選択科目数：58科目（うち専門科目11科目、学校設定科目20科目）（＊）
各年次の選択可能な選択科目数：1年次1科目（2単位）、2年次3科目（6単位）、3年次6～8科目（18単位）
特徴ある教科・科目：学校設定教科・科目「探究ナビ」（1・2年次各2単位、3年次3単位）
指定校等：2011年度～教育課程特例校、24年度～DXハイスクール採択校

教育課程 編成の背景・特徴

自由かつバランスよく履修できる選択科目の仕組みに

大阪府の教育を先導するナビゲーションスクールの大阪府教育センター附属高校は、大学進学から就職まで、多様な希望進路を持つ地域の生徒が入学する全日制普通科単位制高校だ。「共に学び、共に敬い、共に高まる」をスローガンとし、豊かな感性、確かな学力、飽くなき探究心をもってたくましく生き抜く人物の育成を教育理念に掲げている（**図1**）。その実現のために、2011年度の開校時から独自の教育課程を編成している。大きな特徴は次の2つ。

◎約60もの選択科目を設定

1つめは多岐にわたる選択科目だ。生徒が希望進路に応じた学びを自らデザインできるよう、現在は約60もの選択科目を設定。文系・理系の概念はなく、文系学部・学科志望の生徒が「数学Ⅲ」を履修したり、芸術系学部・学科志望の生徒が設計を学ぶために「物理」を履修したりすることも可能だ。

一方で、履修する選択科目が特定の教科に偏ることがないように、2年次は「A、B」、3年次は「α～δ」「①～⑥」の群を設けて各群に選択科目を割りあて、生徒は各群から1科目ずつ選択する仕組みにした（**図2**）。「生徒の関心を尊重しつつも、各教科をバランスよく学べるよう、教務部が慎重に検討して各群に選択科目を割りあてました。また、国語、数学、英語は、希望進路にかかわらず3年間を通じて学習時間を確保してほしいと考え、3年次に数学の選択必修科目を設定しました」と、福本美紀校長は説明する。

◎5段階評価を行う「探究ナビ」

2つめは開校時から教育課程特例校の指定を受け、「総合的な探究の時間」の代替として設定している学校設定教科・科目「探究ナビ」だ。生徒がこれからの社会で必要な資質・能力を身につけることを目標に、仲間と協働して取り組むグループ探究を柱とする3年間の系統的なカリキュラムを編成。現在

図1　スクール・ミッション、グラデュエーション・ポリシー

スクール・ミッション（教育理念）
「共に学び、共に敬い、共に高まる」の下、変化の激しい社会の中で、豊かな感性、確かな学力、飽くなき探究心をもってたくましく生き抜く人物を育成する。

グラデュエーション・ポリシー
- 全教育活動において、課題を発見し主体的に挑戦する力、他者と協働しながら課題を解決する力、考えをまとめ表現する力を育成します。
- 1人1台端末と知識創造の場となる「探究図書館」を有効に活用することで、個別最適な学びや協働的な学びを確かなものにしながら、自ら学びに向かう力を育成します。
- 「授業・学習」「探究的な学び」「進路学習」「部活動・行事・ボランティア」の4つの学びを通して、社会で生き抜く力を身につけさせるとともに、社会に貢献しようとする気概を持った生徒を育てます。

※学校資料を基に編集部で作成。

＊ 選択科目は約60科目を目安として年度ごとに検討しており、2025年度は58科目とした。

は1・2年次各2単位、3年次3単位の計7単位と、「総合的な探究の時間」の標準単位数よりも多く設定し、教育活動の軸に据えて力を入れている。

学習評価にも特徴があり、5段階評価を行い、評定を出している。各活動の前に、「問いを立てることの重要性について説明できる」といった、活動の目標と、目標の達成度を測るルーブリックを生徒に提示。活動中、教師は生徒との対話を通じて形成的評価を重ねつつ、生徒が自ら考える活動になるよう、支援する。そして、活動後の自己評価・相互評価も踏まえて5段階評価を行い、学期末には評定を出す。「探究ナビ」を担当する木村友大先生は、その評価方法は生徒の意欲や成長に直結していると語る。

「探究学習で重要なのは、自身の資質・能力の変容の過程をメタ認知することだと考えています。活動中、生徒は教師や他者との対話を通じて自分の状況を評価規準に照らし合わせ、何度も振り返りをします。評定は、そうしたプロセスの積み重ねだと生徒は理解しています。教師が生徒の到達度を丁寧に見取り、こまめに形成的評価を行うことは、生徒の成長を促し、頑張りが数値として表れることは、生徒の動機づけになっています」

校長
福本美紀
ふくもと・みき
同校に赴任して2年目。

首席、「探究ナビ」担当
木村友大
きむら・ともひろ
同校に赴任して6年目。理科（化学）。

学校概要

設立 2011（平成23）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約240人
2024年度卒業生進路実績 私立大は、京都産業大、京都女子大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、大阪経済大、大阪工業大、大阪体育大、関西外国語大、近畿大、摂南大、桃山学院大、関西学院大などに延べ197人が合格。短大・専門学校進学79人。就職15人。

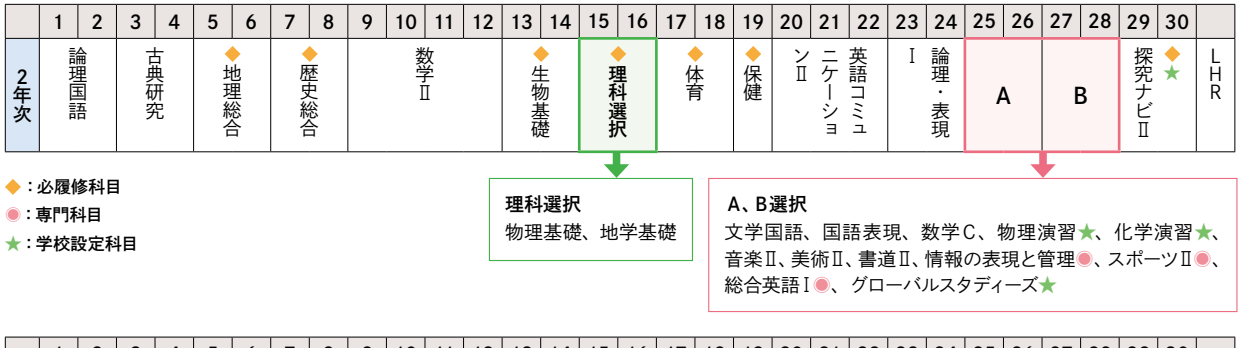
教育課程 運用の工夫

生徒が自ら学びを深める時間を確保するため30単位に減単

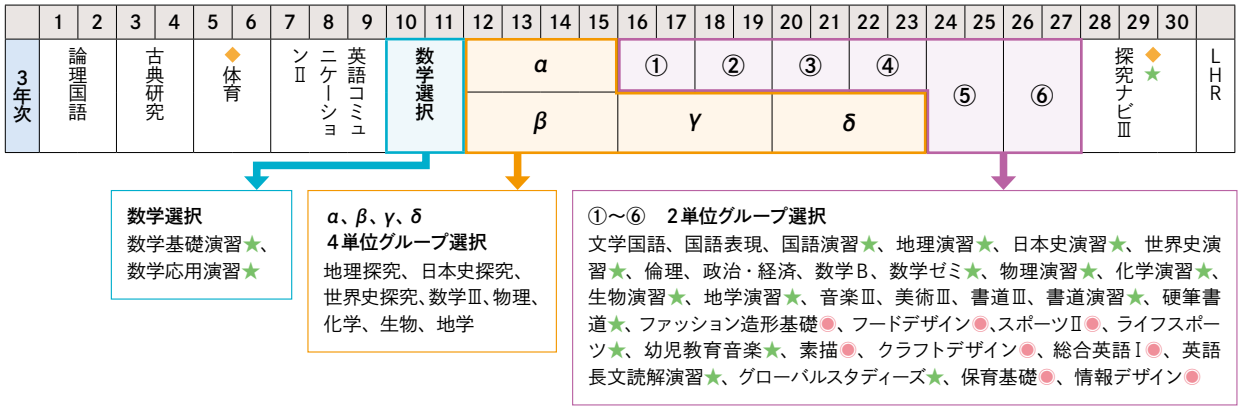
◎選択科目は少人数でも開講

生徒が学びを自らデザインできるよう、教師は科目選択を丁寧に支援している。2・3年次の履修科目の選択に向けて、6月の保護者懇談前に予備調査を行い、懇談で生徒に意向を確認。11月の保護者懇談の前に本調査を行

図2 2・3年次の教育課程



◆：必履修科目
●：専門科目
★：学校設定科目



注1）図示していないが、1年次は芸術の選択必履修科目（音楽Ⅰ、美術Ⅰ、書道Ⅰ）がある。　注2）2・3年次に同じ科目があるが、学年別に開講。
注3）「A、B」「α、β、γ、δ」「①～⑥」の各群にはそれぞれ科目が割りあてられており、生徒はその割りあてられた科目の中から1科目を選択する。例えば、「γ」に割りあてられた科目から1科目選択するか、「①」に割りあてられた科目と「②」に割りあてられた科目から1科目ずつ選択する。
※学校資料を基に編集部で作成。

い、懇談で生徒・保護者と最終確認をして履修する選択科目を決定する。

2年次の選択科目については、数学・理科の担当教師が科目と大学入試や進路との関係などを詳しく説明。入試科目や希望進路、3年次の選択科目を見通した履修計画を生徒に立てさせている。3年次は選択科目が多いため、教科担当に相談することを担任が生徒に促すなど、学年全体で指導。履修する選択科目が決まるまで、担任や教科担当の教師は生徒と面談を重ねる。

「予備・本調査をともに保護者懇談の前に実施することで、懇談の場で科目選択を話題にできるようにしています。また、6月の保護者懇談と併せて保護者向けの科目選択説明会を実施し、選択科目と大学入試や進路との関係を説明しています。その目的は親子が家庭で進路について話し合う土壌をつくることです」（福本校長）

選択科目は履修者が少なくても原則開講している。直近では履修者3人で開講した。そうした対応をすると、担当科目数が多くなる教師もいるが、単位制高校における加配があるため、教師1人あたりの担当コマ数は抑えられている。なお、履修希望者が少ない科目は、本人に履修の目的や学びたい内容を聞き取り、その意向に沿えれば他科目と統合して開講する場合もある。

教育課程は「カリキュラム委員会」で毎年見直している。例えば、開校時は3学年とも33単位だったが、現行の学習指導要領が実施された22年度に30単位に減らした。キャリア教育の一環として、生徒が学びを自らデザインして深める時間を確保するためだ。

◎週1回の「探究会議」で見取りを共有

「探究ナビ」では、生徒支援を充実させるために、各学年に主担当を、1年次はT2に3人の教師、T3に各担任を、2・3年次はT2に各担任を配置している。各学年の担当者が集まる「探究会議」を毎週行い、前時を振り返り、次時の展開について意見を交わしている。

「探究会議では、生徒やチームの名前を具体的に挙げながら、各教師が見取ったことを出し合い、次時のアプローチについて話し合います。多様な視点での見取りを共有することは、的確な形成的評価につながり、生徒の成長を直接的に支えています」（木村先生）

24年度から3年次の「探究ナビ」を1単位増やしたのは、探究会議での教師間の対話がきっかけだった。

「グループ探究で視野を広げる一方で、生徒それぞれの疑問や課題を探究する時間も確保しようという意見が出されました。そこで、グループ探究と個人探究を両輪とするカリキュラムを編成することにしました」（木村先生）

成果と課題

高い同僚性を基盤に、自ら学びを深めていく生徒を支える

自由度の高い科目選択や自分の関心を深めていく探究学習は、将来と真剣に向き合う機会となり、結果として、多くの生徒が納得感を持って早期に進路を決定していると、木村先生は語る。

「『進路に直接関係がなくても、この科目を学んで楽しかった』『今までと違う考え方ができるようになった』などと語る生徒の姿に、自ら学びを選択し、深めていく経験が、人生をいかに豊かにするかを実感しています」

そうした生徒の学びを支えているのが教師間の密な連携だ。毎週行う探究会議などは、勤務時間に配慮しつつ、放課後に生徒と向き合う時間を確保するため、時間割に組み込んでいる（**図3**）。

「校内研修では飲み物やお菓子を用意し、和やかな雰囲気で授業における実践や悩みなどを共有しています。そうした中で同僚性が培われ、会議以外の場でも、生徒に身につけてほしい資質・能力などについて自然と語り合うようになりました。その積み重ねが、学校全体で同じ方向を向く力になっていると感じます」（木村先生）

そうした現場の結束を基盤にしながら、今後の教育課程については、福本校長は次のように語る。

「現在、協働的な学びの中での個別最適な学びの推進をテーマにした教育改革を学校全体で検討しています。そこで大切にしているのは、『好きを見つけて一緒に好きを伸ばす学校』です。本校には、挑戦することを揶揄（やゆ）せず、生徒間、教師間、そして生徒と教師間で頑張りを認め合う『挑戦をリスペクトする文化』があります。生徒一人ひとりが好きなことを柔軟に学べる学校づくりにこれからも挑戦し続け、27年度の改革元年を迎えたいと思っています」

図3　主な委員会・会議

名称	概要
カリキュラム委員会	教育課程全体の検討や選択科目の開講の可否などを議論する。
探究委員会	各学年の主担当が集まり、「探究ナビ」のカリキュラム全体について検討する。
探究会議	「探究ナビ」の担当者が集まり、学年ごとに週1回実施。各教師が見取ったことを出し合い、生徒支援と授業改善について話し合う。
授業研究委員会	各教科の代表者による全体会と、各教科によるコアチームがあり、コアチームは週1回、授業研究や研修内容の検討を実施している。

※学校資料を基に編集部で作成。